國學院大學学術情報リポジトリ

# オンライン時代の神道研究と教育：神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：21世紀COEプログラム

| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」<br>公開日: 2024-06-24<br>キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ<br>キーワード (En):<br>作成者: 井上, 順孝, 色, 音, コベル, スティーブン, キーンレ, ペトラ, 小松, 和彦, ビュテル, ジャン＝ミシェル, ベンテリー, ジョン・R, 國學院大學21世紀COEプログラム<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002000505 |

セッション1

〈発題3〉

# 神道・日本文化の研究及び教育に対するドイツ語圏の新たなチャレンジ
## ―インターネットはどう活用できるか―

ペトラ・キーンレ

ドイツ マールブルク大学日本研究センター研究員

**【司会（ヘイヴンズ）】**　第１セッションの最後の第３部に入りたいと思います。先ほどから中国大陸、アメリカ大陸に渡りましたが、今度はヨーロッパに飛びます。ペトラ・キーンレ先生からのご発表を迎えます。

キーンレ先生はテュービンゲン大学で学んで、卒業論文は「美空ひばりと日本の大衆文化」というテーマについて書かれたそうです。その後、2000年から2001年にテュービンゲン大学のインターネット・プロジェクト、「インターネット上の日本の宗教」に参加して、その後、2001年からマールブルク大学の研究員となりました。そして１年前から日本の宗教についての授業を担当することになりました。ちなみに博士論文のテーマは「日本語インターネット上のキリスト教系新宗教」だったそうです。

ではさっそく、よろしくお願いします。

## 発題

## ペトラ・キーンレ

**【キーンレ】**　ご紹介いただきました、ドイツのマールブルク大学のキーンレと申します。本日はこのシンポジウムに招待していただき、宗教とインターネットの関係について、お話しさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

今日はマールブルク大学で、私が行っている２つの取り組みについてお話したいと思います。まず、ひとつ目は日本研究における研究対象としてと、また一次資料としてのインターネットの研究、くわしく言いますと、インターネットにおける日本の宗教についての研究です。２つめは日本宗教に関する授業において、教授方法の手段として利用されるインターネットについての取り組みです。

まず初めに、私の研究についてお話しするまえに、オンライン時代の宗教について、ここで紹介したいと思います。宗教はその教義を普及させるために、革新的で新しい技術を常に取り入れてきました。グーテンベルクがはじめに印刷したのが聖書であり、また1906年のクリスマスの夜に世界に向けて、初めて放送されたラジオ番組がキリスト教のミサでした。ですから、このようにメディアの変化が宗教史において新しい宗教の形態をもたらしてきたのであって、たとえばテキストを中心としたキリスト教において、印刷技術の発明がなかったとすれば、宗教革命は不可能であったであろうと考えることができます。

そこで、このインターネットが新しい宗教性の形態や新しい宗教を生み出してくるのか、もしくは将来、生み出すのであろうか、またそれはどのようにしてなされるのか、という問題が提起されることになります。

インターネットにおける宗教をテーマとするメディア研究学科の研究はまれですが、インターネットによるコミュニケーションの可能性は新しいものであり、既存の宗教構造に

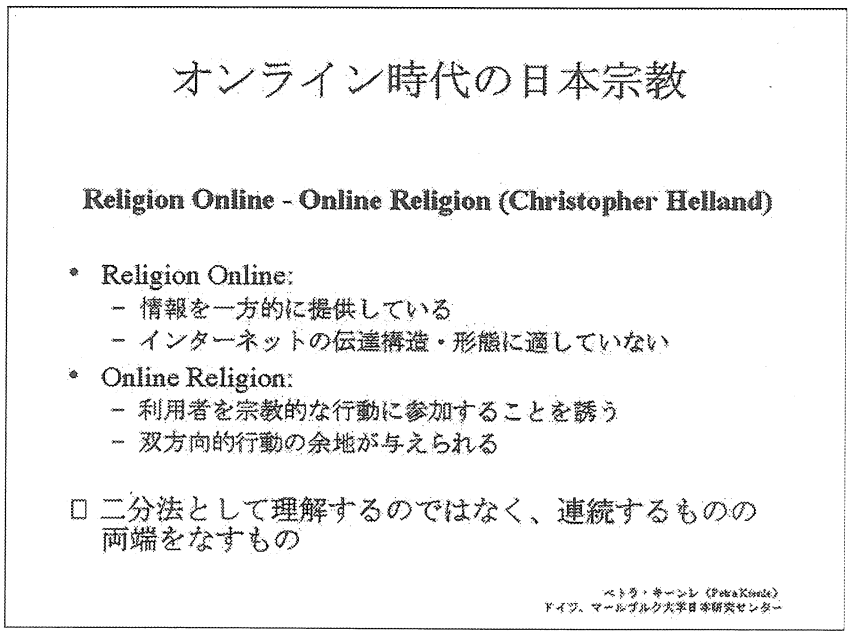
将来、決定的な変化や影響をもたらすだろうと示唆しています。もっとも、これはあくまでも未来形で論じられていることを言い添えなければなりません。

インターネット上の宗教にとってのインターネットというメディアの役割、特殊化を見る際に、従来のメディアと比較して、おそらく重要な発見となるのは、インターネットではコミュニケーション構造が双方向活動の広範な局面を含むということです。

カナダの宗教社会学者である、クリストファー・ヘランド（Christopher Helland）はレリジョン・オンライン "Religion Online" と、オンライン・レリジョン "Online Religion" の区別をしています[1]。レリジョン・オンラインはインターネット利用者を対象としており、各宗教、つまりその信仰内容、歴史、お祭り、それから祭式についてといった情報を一方的に提供しています。そしてそれは本来、インターネットというメディアに適していない、伝統的な伝達形態、構造をもってなされているのです。

それに対して、オンライン・レリジョンは利用者が宗教的な行動に参加したり、実行したりするようにいざない、それによって、無構造で開放的、双方向的な行動の余地が与えられます。ワールド・ワイド・ウェブは、ですから教会、お寺、神社、シナゴーグ、それからモスクとしての役割を果たすことになるのです。

もっとも、多くのウェブサイトではレリジョン・オンラインとオンライン・レリジョンがまざった形で表現されています。ですから、この区別を二分法として理解するのではなく、連続するものの両端をなすものと考えるほうが適していると言ってよいでしょう。




[1] Helland, 2000.

また、インターネットの急速な発展とその利用は、このメディア自身が宗教史のさらなる発展に関する重要な要素になっていくことを意味します。なぜなら、インターネットは宗教的知識やサービス提供をしているのみならず、宗教そのものを変化させ、もしくは最初に述べたように、将来、変化させる可能性を抱えているからです。一方で、インターネットがこうして宗教の現実を映し出す鏡であり、他方では同時に、その触媒となるのです。

さて、ここでドイツのテュービンゲン大学において行われたプロジェクトについてお話ししたいと思います。ドイツ語圏内で日本宗教とインターネットについて、初めて取り組んだのがテュービンゲン大学日本学科の教授、クラウス・アントーニ（Klaus Antoni）で、「インターネット上における日本宗教の自己表現と自己理解」と題するプロジェクトを立ち上げ、私の同僚であるビルギト・シュテムラー（Birgit Staemmler）とともに、2000年から２年間研究活動を行っていました。

このプロジェクトの最初の目的は、ドイツ語圏内で日本宗教に関心を持ち、学術的研究に取り組んでいる人々のために、日本語のインターネット上の宗教的ウェブサイトに関するリンク・リストと、要約された情報によって、情報プールを提供することにありました(http://www.uni-tuebingen.de/cyberreligion/)。

この２年間では、ウェブにおける日本宗教についての包括的な概観を描き出すことは私たちに与えられた資金では十分に行うことができなかったため、結局、非常に野心的な目標となってしまいました。それに加えて、2002年のプロジェクトの終了後、続けて資金提供を受けることが残念ながらできなくなり、このリンク・リストは存続していますが、継続的にリニューアルされ、拡充されることのないものとなってしまっています。

そこではメディア研究学科の内容分析というコンセプトに準拠しながら、ウェブサイトのデータを収集して、系統的に記載するためのフォームが制作されました。その他、ウェブ・マスターや責任者と行われたオンライン上のインタビューや、フェイス・トゥ・フェイスのインタビューによって、ネット上で探知されたデータと知識が日本の現状と比較されました。そして回答者の意図、希望、またウェブサイトに登場することに関して質問がなされたりしました。

ここで、この２年間のプロジェクトで得た研究結果について、もう一度要約したいと思います。テュービンゲン大学でのプロジェクトの主な研究目的は、いくつかのケーススタディーの研究とされ、このケーススタディーとして、いくつかの神道神社とキリスト教会の自己表現のほかに、特にウェブサイトの分析による新宗教運動についての叙述と、責任者のインタビューの研究が進められました。

今までの日本における伝統的宗教と、新宗教運動に関するケーススタディーによって、日本語のインターネット上で宗教組織が提示しているように、同質な形式が存在しないということが示されることになりました。ですが、いくつかのパターンをそこで確認することができます。また唯一、単独でオンラインにあらわれてきたサイバー宗教の発展から来る初期の熱狂的期待に対して、ネット上の宗教は現実の世界からあまりかけ離れていない

ものであるということが明らかになりました。

つまり、人々はオフラインでもするようなことを、オンラインでしているのであって、ただその形が少々異なっているだけなのです。ほとんどといってよい宗教団体や、いかなる宗教的グループも、ネット上でその信条を主張しており、そのいくつかがネットを伝道の場として利用しています。

しかし同時に、多くの反対運動や、背教者やセルフヘルプ・グループにとって、ネットが重要なメディアとなってきていることも言えます。インターネットは宗教団体から、みずからの状況を掲載したサイトや、フォーラムというように、考えられるあらゆる方法で利用されています。そして祈りをささげることや、おみくじを引くといったような儀式を行うこともできるサイトも存在します。

エホバの証人のように新しいこのメディアを拒否したり、その利用を集中化し、コントロールする傾向のある宗教団体はごくわずかなのです。

インターネット上における、特に伝統的な宗教組織のプレゼンテーションは、その実際の実生活における状況や、実社会を反映しているように見えます。つまり、寺院のウェブサイトはお葬式を宣伝し、神社のサイトは結婚式の宣伝をしているのであって、また両者は読者に、イギリスの宗教学者イアン・リーダー（Ian Reader）の言葉、centres of power and entertainment[1] のように、観光名所としての宣伝も行っているのです。

神社も寺院もインターネットを宣伝目的、もしくは表現目的のためのメディアとして利用しているのです。また、日本においてはドイツとは違って、教会税というものがないため、神社、お寺、それから教会はみずから財政を切り盛りしなければならないのであって、それぞれ信者からの出資にその財政を頼っているのです。もしかしたら、それが頻繁に建造物や観光名所として紹介されている理由なのかもしれません。

黒崎先生の研究で確認されたように、神社のウェブサイトのほとんどは、利用者に神社の歴史やその祀られている神様についてより、そのお祭りについての情報を掲載していることを、私たちの研究でも確認することができました。ふつう、これらはレリジョン・オンラインとかかわりがあるのであって、このメディアの双方向の可能性はほんの数例を除いて、なされていないのです。

そのほか、バチカンのサイトやドイツのプロテスタントとカトリック教会のサイトが日本の神社やお寺と同じようなメディアの利用の仕方をしていることも、ここでつけ加えておきます。

すでに黒崎先生の論文にて紹介されたように[2]、例外として、またオンライン・レリジョンの一例として、東京の桜神宮が挙げられます。このウェブサイトでは利用者にすでに2000年からさまざまな双方向の利用の場が提供されています。たとえばバーチャル参拝のほかに、宮司によって祈願済みの、プリントして使えるデジタルおみくじ、絵馬やメール

---

[1] Reader, 1991: 134 ff.
[2] Kurosaki, 2002.

マガジン。それから「宮司に相談」と題する心理相談などです[1]。

2001年9月に行われたインタビューにて、桜神宮の宮司は、インターネットを表現手段だけとして見ているのではなく、コミュニケーション手段としても見ており、一番重要なのは、カウンセリングであると語っています。利用者のターゲットとしては、氏子を第一にと考えているのではなく、外部の人間をそのターゲットとしており、そして双方向的利用の場や、メールによるカウンセリングによって、宮司は神道を再び、第二次大戦前のように、人々の日常生活に融合させたいとしているのです。神道は伝統的に言葉の少ない宗教であるというイメージから、彼は脱皮を図ろうとしているのです。

また、この神社の宮司や、ほかの神社のインタビュー結果は、ウェブサイト利用の理由は人々を各神社にいざなうためであり、バーチャル参拝が必ずしも実際の参拝を代替するものではないという考えを明らかに示しています。ターゲットとしては、若い世代が対象とされており、結婚式に関する問い合わせの数がインターネットを利用するようになってから、明らかに増加したと、東京の日枝神社の責任者が語っていました。

それから神社のサイトを分析している際に、キリスト教会とは反対に、これらの神社ウェブサイトどうしがともにリンクされていないことが判明しました。研究文献上では、双方向的外部リンク数が多いこと、普通該当する組織どうしの緊密なネットワークを形成されることが可能であるとされています。

ここで現実の実社会における競争情勢が反映されていくのです。隣の神社とのリンクなんてもってのほかで、もしそうしたら、人はみんな隣の神社に行ってしまい、経済的に不利な状況を招きかねないからなのです。

さらにその状況の理解の仕方として、各地方において権威のある神道施設としての神社の宗教解釈のあらわれであるという見方もあります。神社の地方的アイデンティティーが強調されているのであり、インターネット上でもそれが貫かれているのです。

さらに宗教とインターネットを題材にするときに、重要な問題として、インターネットの社会的融和力があります。もし、新しい情報技術と、伝達技術が社会像に影響を与えることができるとしたら、どのような規模でそれが行われているのでしょうか。あるいはその反対に、これらの技術はどちらかといえば、社会的連帯の消失や、個人化に貢献しているのでしょうか。

研究文献の中で言われていることですが、ネットワーク社会というキーワードのもと、インターネットの情報普及によって、共同体感情が強められ、もしくは新たに共同体を形成しやすいということは、私の考えでは疑わしいと思われます。たとえばネット上での部落民についての調査において、現実の実社会で起きているように、ネット上でも同じように差別が行われているといった結果が出たことからも、共同体感情が必ずしも起こらないということがわかります。

これに関連して、新宗教運動のウェブサイトの分析は私たちに驚くべき調査結果をもた

---

[1] http://www.sakura.jingu.net/

らしました。それは、特に宣教を強化している新宗教運動は、私たちが思っていたほど、この新しいメディアを利用しているとは限らないということでした。

私たちの研究調査でいくつかの新宗教運動はインターネットを宣教メディアとして利用していますが、その信者たちのほとんどは口コミや既存の社会的ネットワークを基礎として集まっていることが立証されました。インターネットやネットワークを通じての個人的ではないコンタクト、つまりフェイス・トゥ・フェイスでないコンタクトでは、宗教組織と、その宗教に関心を寄せている人々との間の継続的な関係を構築するのは、普通、難しいのです[1]。

インターネットは既存の人間間のコンタクトが利用されていて、それが緊密になっている場合にのみ、信者募集の目的で利用されうるのです。いくつかの宗教組織は、それに加えて、個々のウェブサイトをリンクすることによって、既存のネットワークを強化することに励んでいるのです。

インターネットは、しかしながら、批判的な声の容易な窓口となりかねず、それによって、宗教組織からの脱会を促しやすいという面もあります。一例として、バプテスト教会のウェブサイトが挙げられます。そこではエホバの証人についての情報が得られ、そして牧師たちが脱会カウンセリングを行っているのです。また、いろいろなセルフヘルプ・グループや、いわゆるアンチカルト運動がネット上で反対運動を展開しています。

それからいくつかの宗教組織は、ネガティブに取り上げられることがあるため、インターネット上にその存在を全面に押し出すことによって、自身の意見を活発にインターネットで普及させているのです[2]。たとえば日本語ネット上にアレフ、英語ネット上にサイエントロジーや中国法輪功が見受けられるようにです。

またネット上の批判に対する別の反応は、ちょうどエホバの証人がしているように、自己のインターネット窓口を最小化し、信者にネットサーフィンすることを勧めないといったようにあらわれています。

私たちの２年間のプロジェクトの研究結果は、残念ながら、いくつかのケーススタディーにとどまり、日本語版のワールド・ワイド・ウェブ上の宗教を包括的に把握するまでには至りませんでした。私自身は、数カ月前に研究活動をまた再開し、双方向作用とコミュニケーション、日本語インターネットにおけるキリスト教の新宗教運動と題する博士論文に取り組んでおります。

ここで新しい宗教史的プロセスの調査研究におけるインターネットの更なる一面について、お話しさせていただきます。つまり、どの「正統派」からも部分的、もしくは全く異なっている個人的見解と行動パターンを描き出すようなデータを、インターネット上で収集することができます。また、見えない宗教の実例を比較的容易で、包括的に説明するようなデータもインターネット上で把握することができます。

---

[1] Dawson＆Hennebry, 1999, S.17-39.
[2] Horsfall 2000, S.174.

このバーチャルな存在感のある、いわゆる私事化された宗教、もしくは個人宗教の形態についての研究は、テュービンゲン大学におけるプロジェクトにおいても、そのほかのドイツ語圏の研究活動においても、なおざりにされています。しかしながら、現在宗教の分析に関して、インターネットは見えない宗教や、もしくはいわゆるパッチワーク宗教といったものを深く観察することを可能にしています。

以前はその財政的、人材的資源によって宗教的情報の普及を支配していたのが、大きな宗教組織でありました。しかし今日、比較的簡単にヨーロッパ、北アメリカ、そしてアジアの一部といった、世界中に広がったネットシステムにおいて、自分の信条を表現することができるのです。そうしたことから、個人宗教の組み合わせを見つけることができ、その中で積み木箱の中から選び出されるように、さまざまな宗教的伝統がひとつひとつ積み上げられて、パッチワークとして新しく積み上げられているのです。

1927年生まれのドイツ人社会学者、トーマス・ルックマン(Thomas Luckmann) は1967年に出版した書において、「見えない宗教 (invisible religion)」という概念を初めて使用しました。その見えない宗教は制度化された宗教の枠外で、経験的に見えない、個人的宗教性についての今まで理解されにくかった信仰内容をあらわしているのです。

書籍や雑誌、テレビといった従来のメディアが「宗教の市場」の伝達者でしかない一方、インターネットは双方向的メディアとして、消費者の視点を伝えることができます。宗教関連のウェブサイト上のウェブログ、チャットルーム、ゲストブック、メーリングリストなどの調査により、消費者個人の関心や欲求を理解することができるのです。

インターネットにおいては制度化された大きな宗教団体の枠外で、宗教についてまさに生き生きとダイナミックに論じられ、またその宗教についての情報が提供されているのです。そしてまた、インターネットはルックマンの言う見えない宗教や、いわゆるパッチワーク宗教の個人的相関を表現しているのです。

また、日本語ネット上にほとんどの宗教団体の公式ホームページのほかに、自分自身を信仰が深いと理解し、もしくは宗教的であると表現し、または宗教的サービスを提供しているように、さまざまな形でインターネットに登場する個人の数が数え切れないほど存在しています。次の例を皆さんにご紹介したいと思います。

陽陰舎という、神武と名乗る男性のウェブサイトです[1]。神武は自分を霊媒とみなし、神道並びに仏教に関連し、子宝に恵まれないことや、病気などに対するおはらいといったようなサービスを行っており、また結婚の相性や家相についての相談にも乗っています。このウェブサイトは私が思うには個人宗教性とパッチワーク宗教の一例と考えることができると思われます。また宗教に対する、もしくは宗教に関するさまざまな個人的意見表示の例として、オンライン百科事典、ウィキペディアが挙げられます。ここで興味深いのは、記載されている事柄の正当性が論議されることができるノートの存在です。

インターネットにおける個人的信仰表現の多彩さは、さまざまな伝統の要素からなる、

---

[1] http://www.youinsya.jp/

宗教的多様さのイメージをはるかに越えるものとなっています。大きな宗教団体や教会、自己理解によって、こういった個人的宗教性の形態は今までフェードアウトされていたり、もしくは民間信仰として位置づけられていたのです。

ですから、個人的宗教性へのさまざまな形態の調査から、新しく興味深い洞察が期待されています。そこで、その基礎的問題として、インターネットもしくはＣＭＣ (Computer-Mediated Communication) が個人宗教的な意見や主観的宗教アイデンティティーの発展を促すのかどうかということが挙げられます。

それに対し、ドイツ語圏のインターネット上の個人宗教とパッチワーク宗教についての研究において、この新しいメディアがそのような宗教性の生成を促すという命題が出されています。ですが、日本においてはすでに宗教的多様性が満たされるのであって、宗教概念もしくは宗教と信仰のイメージがひとつの宗教からの影響のみにとどまっていないため、これが日本にも該当するかどうかは疑わしいと思われます。日本の日常における宗教にまつわる行動は神道と仏教から影響を受けているのであって、つまりパッチワークと言えるでしょう。もっともインターネットによって、さらにその知識を深めることができ、より個人的に自己の宗教をつくり上げることができるのです。

ここで確認されるのは、インターネットにおいて、匿名の世界一般における、新たな様式が成立していることです。特に若者が社会的責任をためらっているということから、宗教団体に親近感を抱くと同時に、それからある一定の距離を置くといったように、近代的欲求が新宗教運動についての研究で、明らかになっています。この共同体の匿名的性質が、新宗教運動の魅力となっているのです。

この発表の２つ目のテーマである、マールブルク大学で行われるようになった、Introduction to the religious systems of modern Japan というインターネットコース[1]について紹介させていただきます。このコースを構想し、実現させたのは私ではなく、マールブルク大学宗教学部退官教授で、日本宗教を専門に研究された、マイケル・パイ (Michael Pye) 先生によるものです。先生は定年・退官された後、現在、京都の大谷大学で客員教授として研究を続けておられます。

このインターネットコースは内容的には未完成の状態ですが、私や宗教学部の研究員によって、すでに約１年前から宗教学部と日本研究学科にて、このコースが開かれています。このコースは魅力的なオリエンテーションサイト、アーカイブ資料、文献目録と、それからそのほかの利用可能な電子的コンタクトのコンビネーションからなります。１学期につき８回、つまりそのコースの全体時間の約半分のみが授業としての形で行われています。しかし、このコースではインターネットによって、持続的指導、特にフレキシブルで、個人指導が可能となっています。

インターネットコースは学生たちに複雑な題材へのみずからの取り組みを可能にさせています。またそれと同時に、参加しているグループ内での双方向作用が重要な役を演じて

---

[1] http://cgi-host.uni-marburg.de/~relwiss/japan-einheit/

おり、勉強の成績単位がきちんと決められています。いわゆる、一方方向のコミュニケーションである講演、講義、ゼミナール、文書といったものだけではなく、チャット、フォーラム、メールといったような双方向のコミュニケーションも使用されることになります。

教育方法としての特色は調査的学習法、つまりコースが明確に提示された担当教授を持たず、学生たちが独自で取り決めるということにあり、彼らは研究対象に関して、意欲的に自分で取り組んでいるのです。

このインターネットコースはその国際性が保たれるべきということと、また学習内容がほかの大学においても提供されているということから、大部分が英語で進められています。現在のところ、このコースはフィンランドのヘルシンキ大学とドイツのハノーバー大学でも提供されています。

このコースはコピーライトに基づいて、その使用が制限されており、パスワードを取得しないとログインすることができないようになっています。授業はそれぞれ4個の学習要素を含む6つの章から、全部で24個の学習要素から成り立っています。

第1章、"Introducing Japanese Religions" は理論と方法についての導入部で、現世利益、お祭り、先祖供養、年中行事といった頻繁に使用される概念とテーマが説明されています。

第1章第2項、"The Basic themes of 'primal religions' in Japan" では、マイケル・パイ先生がプライマル・レリジョン primal religion という概念について導入的説明をしています。この授業のすべて 24 個の学習要素は2つの短いテキスト、映像資料、引用文、そしていわゆるアーカイブ・ポート archive port からなっています。これらのアーカイブ・ポートは学生たちが取り組む課題と問題や、個々のテーマに関するデジタル化され、ダウンロード可能な文書からなる、文書アーカイブ、テキスト・アーカイブや映像アーカイブ、それから文献目録から構成されています。

そしてそれに続く2つの章、"The religious structuring of space in Japan"、"The religious structuring of time in Japan" は空間と時間における日本の宗教性について描写しています。ここで空間というのは、神社やお寺、山であり、お参り、参道、鳥居であり、時間というのは年中行事やお祭りを指しています。

第4章、"Festivals of life and welfare" は日本の宗教性のある重要な面、つまりお祭りがテーマとして叙述され、うちわやポスターの絵によって描き出されています。

そして第5章、"Life cycle rites and caring for ancestors" では、出生、結婚といった人生におけるさまざまな儀式が取り上げられています。

そして第6章、"Japanese religions in their variety" ではプライマル・レリジョンとしての神道と仏教が描写されています。この章においては神道と仏教が日本の宗教史において、2つの全く異なる宗教として見られるのではなく、日本のいわゆるプライマル・レリジョンの構成要素として見られるべきであることが明らかにされています。

第6章第3項では近い将来に、新宗教運動、キリスト教などについての情報が取り入れ

られるべきだとされています。

以上に加えて、report and appraisal という最終項では教員に対するフィードバックが行われる一方で、個々の学生たちによって、その時点までまとめ上げられた勉強の成果が、活発なディスカッションのもとに要約され、結論として導き出されます。学生たちは報告書を作成、口頭プレゼンテーションを行い、そこでは教員やほかの学生たちとともに授業もしくはインターネット・フォーラムという形でディスカッションが行われています。

既に、Introduction to the religious systems of modern Japan というタイトルが示しているように、ここでは普通、日本の伝統宗教を宗教史の上で表現し、テーマとして論じるという、日本宗教を教える際の在来の方法をとっていません。大多数の日本人は神道と仏教の儀式に参加したり、お参りしたり、つまり、one is born Shintō but dies Buddhist[1] と説明されているのです。

神道と仏教はこの授業においては、日本の２つの異なった宗教であるという表現を必ずしも使用していません。それよりも理解されるべきとされているのが、ブライアン・ボッキング (Brian Bocking) が提唱しているシンディズム Shinddhism という表現に近い形の、神道と仏教が同じように影響を与えている日本の宗教的な日常文化の観点、つまりプライマル・レリジョンなのであるとしています[2]。

また神道や仏教についての知識と同時に、現代の新宗教運動についても、その独特さや相違点について紹介しています。そこで中心となってくるのが神道と仏教から、その基本が影響を受けている、日本の日常宗教の一般的な文化層の分析であります。つまり、現在、日本の宗教文化における個々のテーマの観点、たとえばバイオサイエンスの新しいオプションや中絶といった観点について、講義や講演という形で授業が行われているのです。

最後に、今日はドイツにおける宗教に関する日本研究の研究対象としてのインターネットへの取り組み、そしてマールブルク大学での日本宗教に関する授業における教育メディアとしてのインターネットへの取り組みのいくつかの例を紹介させていただきましたが、ここで、私は神道専門家ではないという立場から、宗教とインターネット、もしくは神道とオンライン時代というテーマについて、最後にいくつかの論点とディスカッションに向ける問題を挙げさせていただきます。

まず一般的な問題ですが、神道や日本宗教を一般に学んだり、研究したりするには、どのようにしてインターネットが利用されるべきであるかという問題です。たとえばワールド・ワイド・ウェブであったり、フォーラムといったような、どのインターネット分野が特に注目されるべきなのでしょうか。ここで、このメディアが個々人の宗教的自己理解や、宗教団体の自己表現を容易に調査させ、それにより、研究者や教員たちにある一定の場所と時間から、フレキシビリティーを与えられるといったような、インターネットの利点は疑う余地がないことを言わせていただきます。

---

[1] Reader, 1991.
[2] Bocking, 2004.

それから、授業では宗教史のみに関心が注がれていますが、宗教は常に社会的視点、信仰内容、宗教的行動といったさまざまな次元を持っています。そこで神道のどの視点が授業で取り扱われるべきなのでしょうか。また、神社や神社本庁のウェブサイト上の神道の表現が日本における神道の包括概念として写し出されているのでしょうか。

そして、ここで一番重要なテーマは一体何でしょうか。神社オンライン・ネットワーク連盟はそのホームページで、「インターネットを通じて、日本の伝統と神社神道の正しい知識を広めること」がその主な目的であると記載しています。この神道の正しい知識とはどう理解すべきものなのでしょうか。

これらの問題を提示したところで、私の発表を終わらせていただきます。皆さんからのご意見をお願いします。ご清聴ありがとうございました。

# コメントと質疑応答

**【司会（ヘイヴンズ）】**　ありがとうございました。非常に内容の濃い発表で、ドイツのテュービンゲン大学とマールブルク大学で行われている宗教とインターネット・プロジェクトの成果とあり方について話してくださいました。

では、今度は黒崎浩行先生からコメントをお願いします。

**【黒崎浩行】**　前半と後半で大きく話が転換したようなところがあるのですけれども、問題意識としてはつながっている部分が実はあるんじゃないかという印象を私は受けました。

前半はインターネット上の宗教といいますか、インターネットにあらわれている日本宗教の現象をどう見るかというお話だったかと思います。いくつか論点があったと思いますけれども、ひとつは従来型のメディアの延長としてインターネットというものを布教手段として使うものと、インターネットの活動を通じて新しい宗教性が生まれてくるんじゃないかという、その２つの極があって、それがまざり合っているという認識。

それから特に新しいと言われているものの中に、たとえばカウンセリングですとか、個人宗教ですとか、そういった新しさの内実についての着目ということがありました。それからインターネットというものが、社会に浸透していくことによって、宗教集団にとって、果たして求心力が生まれるのか、それとも遠心力が生じるのかという、宗教集団にとっての影響という問題。

それからちょっと最初に言ったことと重なりますけれども、匿名性ですとか、それからパッチワーク性ですとか、個人宗教性といったような新しい宗教性のさまざまな特質とい

うものについて焦点が当てられる。そういう研究をペトラ・キーンレさん、それから今日はいらっしゃっていませんけれども、ビルギト・シュテムラーさんがドイツでやってこられたということでした。

私自身も 1998 年ぐらいからインターネットと宗教とのかかわりについて、共同研究をやってきましたけれども、あまりめぼしい結果、成果というものが実は得られていない。というのは、ひとつはインターネット上の宗教に対して目を向けるということに、あまり人々が関心を持っていない。その宗教の当事者、特に日本の伝統宗教の当事者にとっては、インターネットというものがしだいに普及してきて、その影響力というものが増すということはわかっているんだけれども、それを自分たちの宗教活動にどのように取り入れるのか、あるいは取り入れることによって、どういう問題が生じてくるのかということに対して、あまり関心がないまま、現在に至っている。そういう問題がひとつあったのではないかと思います。

しかし、先ほど井上先生から神社のサイトはたくさんあるじゃないかとご指摘がありました。そういう意味で言うと、先ほどのキーンレさんが引用されたヘランドさんのレリジョン・オンラインとオンライン・レリジョンという二分法から言うと、レリジョン・オンラインというのは、かなり一般的になってきているという印象を受けます。しかし、それがどれだけ人々の意識とか、それから宗教集団のあり方というものに対して影響を及ぼしているのか、及ぼしていないのかという問題はまだあまり検討されていない状況にあるのではないかというのが私自身の実感でもあります。

その中で、このシンポジウムは神道ということに焦点を当てていますので、神道というものを考えるときに、どういう問題が立ちあらわれてくるのかということに少し話を絞っていきたいと思います。ペトラ・キーンレさんは桜神宮という例を紹介されました。これはご承知の方もいらっしゃると思いますけれども、教派神道の神習教という教団の本部がある神社です。世田谷区の桜新町にあります。私も一度インタビューをしたことがありますけれども、こちらの宮司さんは個人に対するカウンセリングということに非常に関心を抱いていて、ある大学の臨床心理学科を受講したりということもされている。そういう個人的にも、それから教団としても力を入れたいことをインターネットでも展開しているという問題意識に立って行っている方です。

それから教派神道で言うと、これは当の教団は教派神道という言い方をすでに避けようとしていますけれども、金光教などでもそういったカウンセリング、それから悩んでいる人、救いを求めている人というのは、どこで探したらいいのか。それはやはりインターネット上で探せば、一番そういった悩んでいる姿というものがとらえやすいのではないか。そういう視点から、布教活動にインターネットを利用するという取り組みをしているところもあるわけです。

こういったものまで含めて、幅広く神道というふうにとらえるのか、それとも伝統的な共同体の基盤に立ったお祭り、それから年中行事、それから人生儀礼といったものをメイ

ンに据えている姿というものを神道ととらえるのか、そういった、神道をどこまで幅広くとらえるのか、あるいはどういう問題を神道について考える際に押さえるのかということも、実はこのインターネット上の宗教ということを考えていく上で、非常に難しい問題になってくるんじゃないかと、私は思っています。

今までのところ、特に伝統的な神社神道のほうでは、宣伝・布教のメディアとして活用する、それからさまざまな神社の写真ですとか、それからお祭りの画像ですとか、そういったものを提供する、それを利用することがどんどん可能になってきているという部分では、大きな変化があるのだけれども、そこからさらに一歩踏み込むと、やはりこういった教派神道や神道系新宗教、さまざまなほかの新宗教で取り組まれているようなケースが持っている要素というものも、一緒に検討していかないとわからないんじゃないかという問題意識をひとつは感じています。

ですから、これからこのシンポジウムで検討していく中で、オンライン時代の神道研究と教育という場合に、そういった神道というもののさまざまなセクターをどれだけ幅広くとらえることができるのかという問題がひとつ、あるんじゃないかと思います。

それからもうひとつ、後半のほうでは、マイケル・パイ先生が制作されたIntroduction to the religious systems of modern Japanというコースウェアを紹介されました。これは日常の日本の宗教をとらえようという明確な視点から構成されたコースウェアだという印象を私は受けました。

こういったものを学生に提供するという場合、これはある明確な視点に立った教材を提供し、学生はそれを閲覧する。その閲覧した結果、その学習したものをさらに生かしていく。そういう形をとっていくのではないかと思うのですが、こういった非常に体系づけられたコースウェアを提供するという場合と、インターネット上にあるさまざまな神道に関する情報を閲覧する。その中から学んでいくという問題。これはやっぱりこれから先どういうふうに、この体系づけられたコースウェアと、それからインターネット上にある混沌とした情報をどう判断し、選別し、学んでいくかという、このせめぎ合いというものをどういうふうにとらえていくのかということが、これからひとつ問題になってくるのではないかと思います。

実はキーンレ先生の前にコベル先生が発表されたときにも、私はこういうことをやっていますというのを言いたいと思って、ちょっとうずうずしていたのですけれども、コベル先生は、学生が自分で調べてきたウェブサイトについて、それをレビューする、評論を書くというレポートをやらせるというのをやっているとおっしゃっていました。私も自分が受け持っている授業の中で、30ぐらいの神社のサイトを自分で調べて、チェック項目を自分で立てて、そのチェック項目についてどう評価するか、あるいはそのチェック項目があるかないかというのを見て、それについてレポートをまとめるということをやらせています。

そんなふうに試みているひとつの理由というのは、やっぱりインターネット、それから

インターネットに限らず、さまざまなこういったデジタル化されたメディアというものを学生、特に若い人たちが利用する――私もまだ若いつもりでいますけれども、若い人たちが利用するときに生じるひとつの問題というのは、簡単に引用ができてしまう。それから要約することもある程度コピー・アンド・ペーストでできてしまう。ある意味で与えられたものを自動的に利用するということが非常に簡単にできてしまうという問題があるだろうと思います。そういったメディアを利用するときに、どこまで自分の判断力を発揮することができるのかということが、実はこれから先、学んでいく人たちひとりひとりに求められていくことなのではないかと思います。

判断基準を示す、判断基準に従って振り分けていくということももちろん大事なんですけれども、その前に自分の判断力を発揮する機会をこういったメディアに触れたときにやらせてあげるということが実は非常に大事なことなんじゃないかと思います。

そういった場合に、非常に体系づけられたコースウェアを提供するということにものすごくエネルギーが割かれるのですが、学生はその割かれたエネルギーに対して、どういうふうにこたえているのか、逆に混沌としたインターネット上の情報から自分で情報を振り分けていく、そこから学んでいくという体験をする場合と、学生にとってみると、そのコースウェアを提供することのどのようなメリット・デメリットというのがあるのかということを、このマールブルク大学でのキーンレさんは、チューターとしてこれを活用していらっしゃるわけですね。ですので、その学生の反応ということをもう少しお話しいただくと、その辺が会場の中で共有できるのではないかと思います。

私のコメントは以上です。

**【司会（ヘイヴンズ）】**　ありがとうございました。それではキーンレさん、お願いします。

**【キーンレ】**　学生たちの反応はインターネットコースに対しては、わりあいいいという判断なのですけれども、ドイツ人学生たちには、ドイツではふつうはひとつの宗教を信じているという感じで、ひとつじゃない、２つの宗教に属するという考え方や、神社にもお寺にもお参りをするということは、ドイツ人学生にとっては理解が難しいということですね。

しかしながら、空間と時間のコンセプトに方向づけられた授業内容によって、それについて説明がなされているように、個々の学習が提示され、その際の学習内容をみずから選択できることから、学生たちを意欲づけることができ、結果的にはみずからあるテーマに取り組むことにつながりました。同時に、何かそのグループ内で双方向作用が重要な役割を演じることになりました。

フォーラムという形でのオンラインや、授業といったオフライン状態にて、日本における宗教的日常文化のさまざまなテーマについて興味深い、嬉々としたディスカッションが行われています。

そしてあとは、インターネット上の情報、ウェブサイトを使うとき、だいたいアカデミ

ックじゃないサイトだと、一次資料として扱うということです。

**【司会（ヘイヴンズ）】**　ありがとうございました。

まだ時間がありますので、フロアから質問があると思いますが、手を挙げてください。いかがでしょうか。

**【エルンスト・ロコバント】**　東洋大学のロコバントです。

私の記憶が間違っていなければ、先ほどインターネットの効果の結果として、片方、個人化、私事化、プライベート化する方向があって、宗教の扱い方、片方で公益化の、お互いに矛盾するような動きがあるとおっしゃったと思いますけれども、その前者の私事化とか、見えない宗教とか、これに関して、これはまさに 19 世紀の日本語で何と言うかわからないけれども、ドイツ語で Pietismus〔敬虔主義〕、感情主義というか、森に行って大自然の中で神様の存在を感じとるとか、そういう感覚の技術による再創生ではなかろうかという印象があったのですが、キーンレさんから見て、いかがでしょうか。

**【キーンレ】**　Pietismus という言葉は全然知らないんですけれども、たとえばドイツ語上のネットには、私事化された宗教というのは、たとえばウイッカ Wicca の宗教とか、魔法という宗教があるのですね。インターネットが成長してから、ウイッカのウェブサイトとリンク集がすごく多くなったのです。

**【司会（ヘイヴンズ）】**　ほかに。小松先生。

**【小松】**　前半と後半に話題が分かれたということですが、オンライン・レリジョンのところについて、これをこういうふうに考えることはできるでしょうか。たとえばインターネット上での銀行ができるとか、インターネットだけの大学が将来できるとか、いろいろな、いわば現実にあるものは時間と空間に制約されていますが、インターネットに入りますと、世界中が容易にそこにアクセスできるわけですから、それを克服した形のもうひとつのインターネット上の現実の社会の投影、コピーみたいなものがやがて生まれてくる。その中に宗教も入っているのだというようなことを考えさせるようなお話だったような気がしたのです。

ですから、宗教もそういういろいろなものの流れの中のひとつだと理解していいのでしょうか。現実との関係から極端に言えば全く切れているというようなことが宗教では考えられるような気もします。

それからもうひとつは、後半の部分ですけれども、要はすべての教科書を電子化して、イントロダクションを掲載していると。そうすると、これも図書館の本が将来、すべて電子化されていけば、電子化された図書館ができる。たとえば国学院の本を全ページ、本にする。そういうことの一部として、教科書も電子化されるというような感じがしました。両方、関連していると思いますので、ご意見をいただければと思います。

**【キーンレ】**　日本宗教についてドイツには教科書がないので、いろいろ教材とか探しながら授業をやっているのではないでしょうか。そしてそれは、ちょっと面倒くさいので、そういうコースをつくったのです。

**【小松】**　オンライン・レリジョンとかいうのがオンライン・バンクとか、オンライン何とかという形で、そういうものの流れのひとつというふうにも考えてよろしいでしょうか。

**【キーンレ】**　はい、そうですね。実際に存在するものだけではなく、たとえばサイバー宗教とかもできるのではないでしょうか。今まで私が知るかぎりではそういうサイバー・レリジョン、サイバー宗教はありませんが。レリジョン・オンラインというのは現実にあるものだけではなく、サイバー宗教というものがあれば、そういうものだと思います。

**【小松】**　オンライン・レリジョンのサイトで、神武のサイトを挙げていらっしゃいましたね。陽陰舎の。あれなんかは、住所があるだけで、ひとりの人間が…。

**【キーンレ】**　住所はあるのですが、本人はほんとうにいるかどうかわからないですね。そして、実はそのウェブサイトは先週まではインターネット上にありましたが、今週はもうないということになりました。残念ですけど。

**【小松】**　ですから、そういうインターネットの中で成り立ってくる宗教というのは、それはひとつで、次の週になくなっているかもしれませんけれども、時間と空間をある程度克服するための手段として、インターネットは非常に便利ですね。夜であろうと、朝であろうと、行こうと思ったら、行けるわけですし、世界の裏側まで行くことができるわけですから、そういう意味では、それを克服している形での宗教というものを成立させるためには、インターネット上に教団をつくるということは非常に興味深いことでありますし、銀行をつくることもできれば、将来、大学をつくることもできるだろうと。

そういう意味で教団をつくることも可能だろうと思って、先ほどのオンライン・レリジョンというのは、その萌芽のような感じがしたのです。ネット上に巨大なある意味では教団とか、大学が将来できるかもしれないというようなことを思ったものですから、質問させていただきました。

**【キーンレ】**　まだわからないですが、まだまだという感じですね。

**【司会（ヘイヴンズ）】**　もうひとつぐらいできると思います。だれか。

**【ロコバント】**　ごくつまらない質問なのですけれども、各神社は経済的な理由で、お互いにリンクは持たないとおっしゃいましたね。そうすると、各県の神社庁とか神社本庁にはリンクがありませんか。そして、神社本庁からやっぱり隣につながるとか、そういうことはないでしょうか。

**【キーンレ】**　神社本庁から各神社のリンクはありますね。

**【司会（ヘイヴンズ）】**　もうひとり、前から手を挙げていた方、どうぞ。

**【井上まどか】**　大変興味深いご発表をありがとうございました。宗教情報リサーチセンターの井上と申します。

前半と後半、非常に興味深く聞かせていただいたのですが、後半のほうについては、ちょっと細かな質問を。前半についてはちょうど今、小松先生がおっしゃったようなオンライン・レリジョンの宗教性というのはどういうふうにとらえればいいのかということを質

問したいと思います。

前半のほうはやや漠然とするかもしれませんが、そのオンライン・レリジョン、あるいはサイバー・レリジョンと言われるものが、ある意味で消費活動、消費行動であるという側面があるわけです。サービスを行います、提供しますという形で。もう一方では宗教的な「知」をユーザー側がどんどん発信していくような状況というのがありますね。消費行動や「知」をどんどん生み出していく方向などがあると思うのです。

コミュニケーションの双方向性のあり方が特徴だとおっしゃっいましたが、私が興味を持っているのは、そのコミュニケーション内における宗教性というのをとらえられないかということなのです。メールマガジンですとか、あるいはフォーラムですとか、その中での関係性の中に宗教的なものを先生が見出していらっしゃるかどうか、そのことをお伺いしたいのです。

後半のほうは、フォーラムの中でのディスカッションに、たとえばマイケル・パイ先生や、それからチューターとして参加されている先生が介入といったら変ですけれども、どれぐらい参加されるのかということです。学生同士だけのディスカッションなのかどうかということです。それからまた、先ほどコベル先生がおっしゃっていた、多文化研究ということもいえるわけですので、そのステレオタイプ化をどういうふうに避けようとされているか、あるいは、そのステレオタイプ化とどうつき合っていくかということです。

最後、３つめですけれども、学生自身が選びとっていくことができるというお話でしたが、どういうことが一番選びとられていったのかをお伺いしたいです。

**【キーンレ】**　学生たちですか。

**【井上まどか】**　学生たちです。

**【キーンレ】**　一番人気があるテーマはお祭りです。やはりいつもそうなのですけどね。

そしてフォーラム・ディスカッションは学生同士と、私たち教員とのディスカッションですが、参加する人としない人がいます。フォーラムの使い方がわからないとかで参加しない学生もいます。

そしてもうひとつは、フォーラムの宗教性について、フォーラムのコミュニケーション方法とか、そういう研究は今まではしていないですから、そういうことはあまり知らないです。よろしいですか。

**【黒崎】**　パイ先生やキーンレ先生は、フォーラムのディスカッションにどれぐらい発言して、かかわっているのですか。

**【キーンレ】**　どれぐらいというと、たとえば時間…。

**【黒崎】**　たとえば学生が言ったことに対して、それにコメントしたりとかでしょうか。

**【キーンレ】**　そうですね。質問があったら、できれば答えを出します。ディスカッションがあったら、コメントもします。

**【司会（ヘイヴンズ）】**　では、今日はこれで終わります。ほんとうにいろいろなインターネットと宗教、神道のトピックが多岐にわたって取り上げられたのですけれども、ひと

つの考える素材として、みなさんに受けとっていただければ幸いだと思います。

ちょっと井上先生から。

**【井上】**　本日はどうもご参加ありがとうございました。

今回はセッションの時間を長めにとってありますけれども、具体的な素材を提供しながらということで、だいぶ皆さんもイメージがわいたと思います。今日はどちらかといえば、教育に力点を置きましたけれども、明日は研究のほうに力点を置いた発表になるかと思います。両者をあわせて、最後に討論いたしまして、具体的に今度どういうことを進めていったらいいかということをやりますので、ぜひ皆さん、お休みの日ですけれども、また来ていただいて、いろいろご発言いただければと思います。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

【参考文献】

Beckerlegge, Gwilym. "Computer-mediated religion: religion on the Internet at the turn of the twenty-first century". In: Beckerlegge, Gwilym. From Sacred Text to Internet. Aldershot, Burlington, Singapore, Sydney: Ashgate, 2001: 219-264.

Bocking, Brian. "The Meanings of Shintō", in: Kleine, Christoph; Schrimpf, Monika; Triplett, Katja. (Hg.). *Unterwegs: Neue Pfade in der Religionswissenschaft - New Paths in the Study of Religion.* München: Biblion Verlag, 2004: 269-286.

Chryssides, George D. "New Religions and the Internet". *Diskus WebEdition* 4/2 (1996).

<http://www.uni-marburg.de//religionswissenschaft/journal/diskus/chryssides_3.html> [22.04.2005]

Dawson, Lorne L.; Cowan, Douglas E. (Hg.) *Religion Online: Finding Faith on the Internet.* New York, London: Routledge, 2004.

Dawson, Lorne; Hennebry, Jenna. "New Religions and the Internet: Recruiting in a New Public Space", in: *Journal of Contemporary Religion* 14/1, 1999: 17-39.

Wakeford, Nina. "New Media, New Methodologies: Studying the Web". In: Gauntlett, David (Hg.). *Web.Studies: Rewiring media studies for the digital age.* London: Arnold, 2000.

Hadden, Jeffrey K.; Cowan, Douglas E. (Hg.). *Religion on the Internet: Research Prospects and Promises.* New York: Elsevier Science, 2000.

Helland, Christopher. "Online-Religion/Religion-Online and Virtual Communitas". In: Hadden, Jeffrey K.; Cowan, Douglas E. (Hg.). *Religion on the Internet: Research Prospects and Promises.* New York: Elsevier Science, 2000: 205-223.

Inoue, Nobutaka (Hg.). *Intānetto jidai no shūkyō* . Tokyo: Shinshokan, 2000.

Inoue, Nobutaka (Hg.). *IT jidai no shūkyō o kangaeru.* Tokyo, 2003.

Karaflogka, Anastasia. "Religious Discourse and Cyberspace". In: *Religion*, 32, 2002: 279-291.

Kienle, Petra und Staemmler, Birgit. "Cyberreligion: Selbstdarstellungen japanischer Religionsgemeinschaften im Internet mit einer Analyse ausgewählter Beispiele". In: Schucher, Günter (Hg.). *Asien und das Internet*, Hamburg: Institut für Asienkunde, 2002:183-193.

Kienle, Petra und Staemmler, Birgit. "Kommunikationsstrategien japanischer Neuer Religionen im Internet". In: Gössmann, Hilaria; Waldenberger, Franz (Hg.). *Medien in Japan. Dokumentation der Jahrestagung der Vereinigung für sozialwissenschaftliche Japanforschung 2001.* Hamburg: Institut für Asienkunde, 2003.

Kienle, Petra und Staemmler, Birgit. "Self-representation of two new religions on the Japanese Internet: Jehovah's Witnesses and Seich no Ie. In: Gottlieb, Nanette; McLelland, Mark (Hg.). *Japanese Cybercultures.* London, New York: Routledge, 2003: 222-234.

Kurosaki Hiroyuki. "Jinja websaito o meguru shakaiteki bunmyaku." In: Kurosaki Hiroyuki (Hg.). *Denshi nettowakingu no fukyū to shūkyō no henyō.* Tokyo: Kokugakuin daigaku Nihon bunka kenkyūjo, 2000:107-128.

Kurosaki Hiroyuki. "Nihon shūkyō no intānetto riyō no hikaku bunseki ni mukete - jinja webusaito no baai ". Tokyo: Kokugakuin daigaku Nihon bunka kenkyūjo, 2000.

Kurosaki Hiroyuki. "Religious Uses of the Internet in Japan: the Social Context". In: *Echoes of Peace* 62 (2002): 7-9.

Merten, Klaus. *Inhaltsanalyse - Einführung in Theorie, Methode und Praxis.* Opladen: Westdeutscher Verlag, 1995.

Pye, Michael. *The Structure of Religious Systems in Contemporary Japan: Shinto variations on Buddhist pilgrimage.* Occasional Papers No. 30, Marburg, 2004.

Pye, Michael. *Electronic projections of Japanese religion and the growth of informal spiritualities.* <http://cgi-host.uni-marburg.de/~relwiss/japan-einheit/> [03.04.2005]

Reader, Ian. *Religion in Contemporary Japan.* Honolulu: University of Hawaii Press, 1991.

Rössler, Patrick. "Standardisierte Inhaltsanalysen im WorldWideWeb. Überlegungen zur Anwendung der Methode am Beispiel einer Studie zu Online-Shopping-Angeboten". In: Beck, Klaus; Vowe Gerhard (Hg.). *Computernetze - ein Medium öffentlicher Kommunikation?* Berlin: Wissenschaftsverlag Volker Spiess, 1997: 245-267.